令和６年度

連携活動記録報告書

ＶＯＬ．１５

令和７年３月

山形大学附属学校

目 次

はじめに ・・・・ 1

Ⅰ 連携活動の記録

令和６年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題 ・・・・ 3

令和６年度 附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題 ・・・・ 6

令和６年度の活動を振り返って ・・・・ 7

１ 幼小中連携

（１）幼小連携 ・・・・１５

（２）幼中連携 ・・・・１８

（３）小中連携 ・・・・１９

２ 特別支援学校連携 ・・・・２０

Ⅱ 付録

山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程 ・・・・２７

附属学校研究・連携推進委員会規程第７条に定める

部会に関する申し合せ ・・・・２９

附属学校研究・連携推進委員名簿 ・・・・３１

はじめに

山形大学附属学校園では、4 校園相互の連携を強化し、校種間の円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行うことを目的として、「山形大学附属学校研究・連携推進委員会」の下に、「共同研究推進部会」・「幼・小・中連携部会」・「特別支援連携部会」の 3 つの部会を設置しています。「共同研究推進部会」の活動については『大学と附属学校園の共同研究報告書』として報告しています。本報告書は、令和 6 年度の「幼・小・中連携部会」と「特別支援連携部会」の活動の記録をまとめたものです。

山形大学附属学校園では、子どもたちの交流活動や連絡会、研修会などを通じて、教員が互いの教育現場を参観し合い、意見や情報を交換しています。その中で、各校園の教育目標に応じた特徴を持つ教育実践に基づいて、附属学校園としての新たな連携の在り方を意識した教育方法の検討に取り組んでいます。また、山形大学附属学校園には、特別支援教育コーディネータとメンタルケア・コーディネータ（平成 23 年度から）及び英語教育コーディネータ（平成 27 年度から）が配置され、「まつなみ学習支援室」（平成 24 年設置）とともに教育支援を行ってきました。これに加えて、令和 5 年度に教育情報化推進コーディネータを新たに配置し、教育活動の情報化を進めているところです。令和 6 年度には山形大学附属学校運営協議会を設定してコミュニティ・スクールとしての活動を開始し、附属学校という特性を活かして、4 校園が多面的に連携した教育実践の追究に取り組んでいます。

山形大学附属学校園は、山形県教育委員会の「探究型学習推進プロジェクト」の推進協力校になっています。それぞれの校園での学びは、連続的につながっていくものとして捉える必要があります。幼稚園での「遊び込む教育」が子どもたちの探究活動の基礎となり、小学校での探究的な学びにつながっていきます。そして、小学校で育まれた地域に根ざした探究的な学びの姿勢が、中学校では視野を広げながら、自分が関心をもった対象を深く理解していく学習へと展開されることになります。さらには、高等学校や大学を学びの場とする、主体的で探究的な学習者として成長していくことが期待されています。また、困難を抱えがちな子どもたちの支援においても、インクルーシブ教育の観点から附属学校全体で子どもたちの豊かな成長を促すしくみを構築することも求められています。

このような課題への取り組みは、地域の公立学校のモデルとして全国の国立大学附属学校に要請されているものです。山形大学附属学校園における連携活動が、単発的な交流活動に止まらず一貫した教育理念に支えられた実質的なものになるよう、今後も 4 校園の連携の在り方を模索していくことが大切だと考えています。

本報告書をご高覧いただき、忌憚のないご意見やご要望をいただければ幸いです。

令和 7（2025）年 2 月

山形大学附属学校運営部長　　三浦　登志一

Ⅰ　連携活動の記録

令和6年度　附属学校園配置のコーディネータの成果と課題　その１

附属小校長　　武田　重泰
メンタルケアコーディネータ（中学校籍　教諭）　　　　数見　静香
特別支援教育コーディネータ（特別支援学校籍　教諭）　藤本　沙織

１　配置のねらい

附属学校園の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

◇教育相談と特別支援教育にける校種間の連携及びその一貫性の推進
◇附属学校園で特別支援を必要とする幼児・児童・生徒への支援の充実と体制整備の推進
◇附属学校園で心の問題を抱える幼児・児童・生徒への支援の充実と体制整備の推進

２　主な職務

◇幼小連携、小中連携における継続した支援・指導の中核
◇該当する幼児・児童・生徒への直接の支援・指導
◇学級担任や教科担任、養護教諭への専門性を生かした支援
◇各校園の教育相談担当者・特別支援コーディネータ・養護教諭との連携
◇まつなみ支援室における支援員への専門的な助言及び教職員の資質向上を促す研修実施

３　今年度（配置14年目）の基本的な考え方

【目　標】
◇早期支援の立場から幼稚園における支援や適正な就学指導に生かす機能強化を図る。
◇各学校園でコーディネータおよびスクールカウンセラーを積極的に活用した組織的な支援体制の充実を図る。
◇個に応じた支援のあり方（当該児童・生徒または保護者、担任支援も含む）を探究する。
◇年齢に応じた発達課題を整理し、幼から中までの12年間継続して課題解決を図る。
◇まつなみ学習支援室の支援員を中心に、別室での学習や取り出し指導の充実を図る。

【役　割】
◇附属学校園の課題を把握し、各校園の担当者と一緒に校園間をつなぐ。
◇各校園の担当者と連携し、各校園の課題解決に向けて指導及び支援を行う。

【具体策】
◇各校園の状況を把握し、幼児・児童・生徒の情報をつなぎ、一貫性のある指導・支援を行う。
◇専門的な情報を収集・整理し、各校園の教員への情報提供及び研修等を通して指導する。

４　今年度の成果（○）と課題（▼）

○特別支援教育のあり方やまつなみ支援室等の役割が保護者に広く認識されてきており、担当者による面談が計画的・継続的に実施された。
○担当者が担任と一緒に課題を整理し、支援方法や合理的配慮等について話し合いを行い、個別の教育支援計画や指導計画を作成したことで、当該児童のニーズに合う教育活動を進めることができた。
▼幼稚園と小学校ともに、幼児と児童に対する支援をコーディネータが行っていることが多い。支援の方法等について相談しながら、各校園の先生方が中心となって、個別の対応ができる体制を整えることが必要である。
▼メンタルケアコーディネータ（中学校在籍）が実際に他三附へ出向く等、各校園に在籍する園児・児童・生徒がメンタルケアコーディネータと関わる機会を増やし、支援の裾野を広げてさせていく。

令和6年度　附属学校園配置のコーディネータの成果と課題　その２

附属小校長　武田　重泰
英語教育コーディネータ（附属小学校籍　教諭）　中村　優太

１　配置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

◇グローバル化に対応した教育環境づくりの推進として、小学校における英語教育の充実強化、中学校における英語教育の高度化に対応する。
◇附属学校園全体の英語教育における幼児・児童・生徒への支援と英語教育の体制整備、推進、充実を図る。
◇異学校種間の英語教育のあり方に関し、地域のモデルとなる実践を行い、その周知を図る。

２　主な職務

◇附属学校全体の英語教育における幼児・児童・生徒への支援・指導の充実に向けて大学教官と連携を図り、その機能・役割を踏まえた専門性を確保しながら体制整備を行う。
◇小学校での外国語科及び外国語活動の授業において、担任と連携した指導、補助を行う。
◇英語教育の充実、強化・高度化に対応した指導力向上プログラム等の開発や作成を行う。
◇附属学校全体の英語教育とその支援・指導を行う教員として、幼小中一貫教育を支える。
◇附属幼稚園での英語遊び等を試行し、幼小連携による具体的な実践を促進する。
◇大学・学部等での研修を積極的に行い、英語教育コーディネータとしての資質向上を図る。

３　今年度（配置10年目）の基本的な考え方

【目　標】
◇学習指導要領に基づく外国語科及び外国語活動の指導充実と年間指導計画の策定・更新
◇附属中学校の英語科と小学校の外国語科及び外国語活動の接続に資する連携強化

【役　割】
◇学級担任やALTと連携し、外国語科及び外国語活動の時間を受け持ち、その充実を図る。
◇県や市の研修の講師として、地域の小学校の研究会・研修会等において指導・助言を行う。
◇附属幼稚園および附属小学校低学年の英語遊びの指導
◇附属中学校英語科の授業づくりへの支援（TTでの授業参加）
◇附属小学校外国語科及び外国語活動への附中英語科教員の参加をコーディネートする。

【具体策】
◇6学年における外国語科（週６コマ）を担当する。
◇1・2学年における英語遊びを複数回担当する。
◇附属幼稚園における年長児の英語遊びを複数回担当する。
◇学習指導研究協議会等において、外国語科及び外国語活動の授業を提案する。
◇研修や参観した公開授業等の情報を整理し、校内研修会等で報告する。

４　今年度の成果（○）と課題（▼）

○幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校において、それぞれの学校の特色を生かしながら様々な実践を行うことができた。
○英語遊びの実践を通じて、幼から小（低学年）の連携モデルの構築を進めることができた。
○学習指導研究協議会では、自ら問題解決を進める子どもの実際の姿を見ていただくことで、小学校外国語科・外国語活動のモデル実践を県内外に発信することができた。
▼今年度の実践をもとに、来年度はさらに、幼・小・中・特の12年間を見通した英語教育カリキュラムのイメージを具現化し、山形大学附属学校園の取り組みとして発信できるようにしていく。

令和6年度　附属学校園配置のコーディネータの成果と課題　その3

附属小校長　武田　重泰
教育情報化推進コーディネータ（附属小学校籍　教諭）　奥山　恭平

1　配置のねらい

附属学校GIGAスクール構想を推進し、四附において一貫性の高いICT教育を行う。

◇小学校におけるICT教育の充実・強化、中学校におけるICT教育の高度化を目指し、教育情報化に対応した教育環境づくりを推進する。
◇附属学校園全体の ICT 教育における幼児・児童・生徒への支援と ICT 教育の体制整備、推進、充実を図る。
◇ICT教育のあり方に関し、地域のモデルとなる実践を行い、その周知を図る。

2　主な職務

◇附属学校全体のICT教育における幼児・児童・生徒への支援・指導の充実に向けて関係機関と連携を図り、その機能・役割を踏まえた専門性を確保しながら体制整備を行う。
◇小学校でのICTを活用した授業を基盤に、担任と連携した指導、補助を行う。
◇ICT教育の充実・強化、高度化に対応した指導力向上プログラム等の開発や作成を行う。
◇附属学校全体のICT教育とその支援・指導を行う教員として、幼小中一貫教育を支える。
◇外部での研修を積極的に行い、教育情報化推進コーディネータとしての資質向上を図る。

3　今年度（配置2年目）の基本的な考え方

【目　標】
◇附属学校GIGAスクール構想に基づいたICT活用の具体的指導および支援
◇校務DX化の推進とICTを活用した教員研修モデルの構築に向けた環境整備

【役　割】
◇小学校を起点に、附属学校全体のICT教育の企画や運営を行う。
◇教員および児童・生徒に対し、ICT機器の活用に関する指導・助言を行う。
◇ICT活用の推進に向け、システムやネットワーク等の環境整備を図る。
◇教務主任や学年主任等と連携し、働き方改革につながる校務のDX化を具体的に行う。

【具体策】
◇教員および児童・生徒を対象に「ICTに関するアンケート」を年間2回実施し、結果に基づいてICT活用の推進に向けた方向性を整理する。
◇教員や児童・生徒の求めに合わせたICT活用について助言したり、効果的な活用のあり方を提示したりする。
◇「学びカフェ」の設計や導入する機材等を選定し、教員の研修の場を整備する。
◇校務のデジタル化を推進し、可能なことから順次整備する。

4　今年度の成果（○）と課題（▼）

○山形大学教員研修高度化事業の一環として、小学校に「学びカフェ」が設置され2年目となる。それに伴い、教員がICTを活用しながら気軽に研修できる環境づくりを積極的に行うことで、教員の学びを広げることができた。
○これまで紙媒体で実施してきた様々なアンケートを見直し、Google フォームを用いたものに変更したり、校務のDX化を進めたりすることで働き方改革につなげることができた。
○今年度は、依頼を受け附属幼稚園、附属特別支援学校に出向いた。また、附属中学校へは技術科の授業の参観を行った。昨年度と比較し、附属学校園間での取り組みが増えた。
▼今後は、小学校での実践を附属学校園全体で共有するとともに、各校園の取り組みや課題について情報交換し、これからのICT教育の方向性を整理していく。

令和6年度　附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題

附属小校長　武田　重泰

1　設置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

◇附属学校園全体の特別支援を必要とする幼児・児童・生徒への支援充実と体制整備の推進を図る。
◇附属学校園の特別支援教育並びに教育相談機能の一層の充実と活用を図る。
◇県内小学校の発達障がい児等通級加配校のモデルとなる研究・実践を積み重ねる。

2　主な職務

学級担任、各コーディネータ、SC（必要に応じて、中学校のSC及び大学の心理教育相談室のスーパーバイザー）、管理職（校長・教頭）と連携して主に以下の職務を行う。

◇学習面、生活面での支援（行動観察、TT指導、取り出し個別指導の実施）
◇メンタル面での支援（教育相談、アドバイス等）
◇保護者との面談、教育相談
◇研修会等の周知・啓発活動の計画・実施

3　支援室の運営

【室　長】 小学校まつなみ支援室長　　長岡　初美　教諭（附属小学校在籍）
【副室長】 特別支援教育コーディネータ　　藤本　沙織　教諭（附属特別支援学校在籍）
【メンタルケアコーディネータ】　　数見　静香　教諭（附属中学校在籍）
【支援員】 小学校まつなみ支援室支援員　　小林　明日香　支援員（週5日5h 勤務）
【スーパーバイザー】 佐藤　宏平氏（山形大学地域教育文化学部　教授）

4　今年度の成果（○）と課題（▼）

○附属学校園間の情報共有が迅速かつ的確に図られ、特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒への継続的な支援が充実した。
○幼稚園児と小学校低学年への早期発達支援及び支援員の幼児・児童への個別的・計画的・継続的支援が有効に機能した。
○個別の指導計画及び保護者の了解を得た教育支援計画に基づいて支援を行い、本人及び保護者の安心感・信頼感の醸成につながっている。
○附属学校園教員の特別支援教育についての理解が深まり、各学年・学級において特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒への対応力が向上している。また、教員が必要なときに相談したり、組織的に支援を行ったりすることで、教員の安心感や心の安定につながっている。
▼組織的に、まつなみ支援室の運営を行っていく。
▼引き続き、支援を必要とする幼児・児童・生徒に対して「切れ目のない支援」ができるよう、幼・小・中での日常的な観察を基盤とした情報共有を一層強化していく。
▼引き続き、保護者の困り感に対応した教育相談や研修の場をより充実させていく。

令和６年度の活動を振り返って

メンタルケアコーディネータ　数見　静香

1　活動報告

（１）特別支援教育コーディネータ及び附属小学校の教育相談担当との連携

・新入生の小学校時の生活の様子や人間関係，これまで行ってきた支援について情報提供をいただいた。

・小中学校に兄弟姉妹が在籍している生徒について必要に応じて情報交換を行った。

・中学校の生徒の様子について、必要に応じて情報提供を行った。

（２）附属幼稚園との連携

附属幼稚園養護教諭と情報を共有したり、週１回幼稚園で勤務している本校の教員から情報を得たりして連携を行った。

（３）中学校スクールカウンセラーとの連携

・カウンセラーに相談者の困り感を事前に伝えたり、カウンセリング後に相談者から了解　を得た内容について聞き取ったりして、支援方法を検討した。

・７月に中学 1 年生を対象にスクリーニングを実施。授業中の生徒の様子を観察し、生徒への支援方法について助言をいただいた。

・２名のカウンセラーから、以下の内容について、全クラスに講話をしていただいた。「友だちの作り方」　「心がつらい時の対処法」　「ネットとの付き合い方」　「アサーションについて」　「受験期の心の整え方」等

・Ｑ－Ｕアンケート分析会に講師として招き、結果の活用方法および捉え方や支援の仕方についてアドバイスをいただいた。

（４）中学校の学級担任・教科担任との連携

・「スズキ校務」を活用し、適宜、生徒の様子やスクールカウンセラーからのアドバイス等を記録し、担任や学年担任団に情報提供した。

・担任、学年担任団との情報交換を積極的に行い、困り感のある生徒の対応について検討した。また、状況に応じて校長や教頭に報告し，ＳＣに繋いだりケース会議を開いたりした。

・学級全体や特別な支援が必要な生徒への支援方法について確認し，指導にあたった。

・教室に入るのが難しい生徒に必要な学習支援について確認したり、授業に出られるような対応策を検討したりした。

・教育相談アンケートを受けて、学年団と協議し、必要に応じて生徒から話を聞いた。

（５）教育相談部会の実施(中学校)

・年度当初に教育相談の年間計画を作成し，教育相談アンケートやＳＣ講話やエンカウンター（ＳGE）、ソーシャルスキルトレーニング（ＳＳＴ）などを計画的に実施できるようにした。

・部会を月２回設け，生徒の情報交換を行い，必要に応じて支援策の検討を行った。

・教育相談アンケートを年４回実施し，生徒の状況や悩みなどを把握し、必要に応じて面談等

で対応するようにした。
・Ｑ－Ｕアンケートを年２回実施し、分析方法を提供し，学級や個々の対応につい検討した。
・全職員を対象に生徒理解研修会を実施した。今年度はスクールカウンセラー 伊藤洋子先生から，「学校で出来る自殺予防～希死念慮のある生徒への関り方～」についての講話をしていただいた。

（６）不登校生への対応（中学校）
・ケース会議を実施し，生徒の状況把握と対応策の検討を行った。
・担任と家庭訪問や電話で知り得た情報を共有し、対応策を検討した。

（７）学習室で過ごす生徒への対応（中学校）
・個別に具体的な取り組みを確認し，毎週，時間割を作成して目標に向かって学習できるように環境を整えた。週末には、１週間の振り返りを行い、翌週の生活に繋げた。
・必要に応じて生徒と面談を行い、心配事や困り事がないか確認しながら、適宜対応した。
・授業に入れるように学級担任や教科担任と連携したり、学習ボランティアの方と対面で学習をしたりするなど、個々に応じた学習支援を行った。
・山形大学の学生ボランティアの協力を得ながら情報を共有し、生徒の心身の変化に早く気づいて、心理的支援を行った。
・学年や学校全体の動向に合わせながら、学習室でもオンラインを活用して学年ごとの活動に参加できるように環境を整えた。
・進路学習として、夏休みに、学習室の生徒と保護者を対象に不登校経験のある卒業生との交流を行った。

２　成果と課題（成果○，課題△）
○小学校からの情報提供を基に、特別な支援が必要な児童・生徒の様子やその支援策について、理解を深めることができた。
○小中学校でつながりのある支援になるよう、特別な支援が必要な児童の保護者を対象に中学校の養護教諭と共に春休みに面談を行い、中学校進学に伴う心配事や困り事を聞いたり中学校への要望などを確認したりした。その後、面談内容について１学年の担任会で報告し、新入生の情報を共有することができた。
○運動会・合唱コンクール等、学校行事への参加体制について、中学校の学習室を利用している生徒と、個々に面談をしながら当日の参加方法について具体的に打合せを行うことで、見通しをもちながら安心して学校生活を送ることができるよう支援することができた。
○不登校や学習室利用経験のある卒業生との交流は、学校生活に不安のある生徒にとって、中学３年生時の学習の様子や、高校選択の幅の広さを知るきっかけとなった。
△中学校の学習室を利用する生徒の心身の状況が安定しないため、教員間での情報共有が難しく、十分に対応できないことがあった。今後、生徒一人一人が安心して学校生活を送れるように関わりを工夫したい。
△小中学校のつながりのある支援をより一層充実させていく必要がある。高学年の児童とメンタルケアコーディネーターの関わる機会を増やすことで児童理解を深め、児童が中学校に進学する際，少しでも不安を取り除き、有意義な学校生活が送れるように支援体制を整えていきたい。

令和６年度の活動を振り返って

附属学校特別支援教育コーディネーター　藤本沙織

１　主な活動の報告

（１）教育的支援

今年度も、幼稚園、小学校において、学級や個人に対する教育的支援を行った。

幼稚園では、学級に入り、気持ちの表現や友達との関わり、集団活動への参加に課題がある幼児に対する直接的な支援を行った。集団の場や友達との関わりの中で不適切な表現が見られた場合は、気持ちを聞き取り代弁することで、自分の思いや要望を言葉で伝えられるように支援した。また、集団活動の場面では、一斉指示で動けない幼児に対して、活動内容を一つずつに分けて伝えたり、予定カードを提示して見通しをもてるようにしたりすることで、みんなが集団での活動に参加できるように支援した。幼児の様子や支援方法について、担任や養護教諭と随時打ち合わせを行い、適切な方法を共有しながら支援を行うことができた。

小学校では、支援が必要な児童に対して、それぞれの方法で支援を行ってきた。教室での学習に不安が大きい児童は、まつなみ支援室に登校し、可能な時間は教室へ行き、授業に参加している。集団での学習に不安感、緊張感を感じている児童だからこそ、支援室で話をしたり、好きなことに取り組んだりする時間があることで気持ちを落ち着け、授業への参加も増えてきている。メリハリをつけ、気持ちを切り替えて授業に参加できることが大切だと考える。また、支援室登校の児童同士、支援員やコーディネーターとの関わりの中で、人との関わり方や学校生活のルールについても伝えてきたことで、挨拶や身の回りの整理整頓など、自ら気付いて活動できることが増えてきた。学習面での困難さを抱えている児童については、学習内容について担任や保護者と相談したうえで、取り出しの学習を行い、物の値段や時間、距離、重さ等、生活で必要な内容を中心に扱った。授業の中で読み書き等に課題のある児童については、教室での授業に入り個別の支援を行った。空き時間は全体を巡回し、気になる児童について、担任に普段の様子を聞き取りながら、相談を行った。

（２）ケース会や情報共有

幼稚園では、個別の支援が必要な幼児についてケース会を行い、個別の教育支援計画や指導計画を作成した。加えて、それに向けての具体的な支援方法について検討したり、その後の成果や課題を共有したりした。また、定期的に開かれる「子どもを語る会」で幼児の成長や課題等を把握し、必要な幼児については、その後の様子を見に行き、担任と相談を行った。

小学校では、担任と一緒に課題を整理し、支援方法や合理的配慮について話し合ったうえで、個別の教育支援計画、指導計画を作成した。まつなみ支援室を利用している児童については、学年会で実態を共有し、それぞれの場での支援について検討した。

幼稚園小学校共に、来年度以降の学びの場の検討が必要な幼児児童について、適切な学びの場や、そこに繋がるための今後の動き方等について、情報提供を行った。

（３）まつなみ学習支援室および支援員等との連携

幼稚園の保育支援は、支援員と中学校講師、特別支援教育コーディネーター３名が交代で勤務しながら行っている。

小学校においては、支援員と特別支援教育コーディネーターが交代で勤務している。一緒に勤務する日がないため、学期に１回程度打ち合わせの時間を設け、児童の様子や支援方法についての情報共有、検討を行っている。また、コーディネーターや支援員の時間割を作成して教職員へ伝えており、担任はそれを見ながら、授業へのサポートや気になる児童の巡回等の要望を伝えている。

（４）保護者支援

幼稚園では、１月に「小学校入学を見据えた子育て」というテーマで、年中児の保護者に向けて講話を行った。幼稚園での幼児の様子と、小学校児童の様子を見ている立場として、これから身に付けたい力、それらを身に付けるための支援についてお話しすることができた。児童発達支援事業所を利用している幼児については、ケース会に参加し、家庭や幼稚園、児童発達支援事業所でのそれぞれの姿や具体的に行っている支援方法、今後の目標等について情報共有を行った。

小学校では、取り出しの学習を行っている児童について面談を行い、今後の目標や学習内容、支援方法等について伝えた。また、今後学びの場の検討が必要な児童については、現在の学習の様子を伝えたうえで、本人が力を伸ばしていける学びの場について相談を行っており、今後も十分に検討していく必要があると考える。

２　今後の取り組みと課題

（１）　幼稚園、小学校ともに、幼児児童に対する個別の支援を支援員やコーディネーターが行っていることが多い。支援の方法等について相談しながら、各校園の先生方が中心となって、個別の対応ができる体制作りを行っていくことが必要である。

（２）　小学校勤務において、まつなみ支援室を利用している児童や取り出し指導を行っている児童、授業中に個別の支援を行っている児童について、担任の先生や支援員、まつなみ支援室担当の先生方との情報共有の時間が確保できないことが多かった。困難さを抱えた児童にとっては、授業に参加しやすい学習環境や活動に取り組みやすい手立てについて、学校全体で共有し、同じように支援を行っていく必要がある。本人の不安感を減らし、それぞれの力を発揮していけるよう、学年会などを利用して、情報共有する時間を確保していきたいと考える。

（３）　幼稚園、小学校ともに、適切な学びの場の検討が必要な幼児児童がいる。幼稚園の集団活動、小学校の一斉指導での学びが困難な幼児児童については、特性に応じて個別の指導・支援を行っていく必要があるが、附属小学校には特別支援学級が設置されていないため、まつなみ支援室だけで十分な指導・支援を行うことが困難である。場合によっては通級指導又は公立の学校への転校を含めた在籍移動の検討が必要となるため早めの対応を行っていく必要がある。一人一人の実態や目指す姿から、どのような環境でどのような支援を行うことが適切なのかということを各校園、保護者、本人と共に考え、適切な学びの場を検討していく必要があると考える。

今年度の活動を振り返って

英語教育コーディネーター　中村　優太

1 今年度の活動の報告

(1)　小学5・6年生における「外国語科」の授業

今年度も、「外国語を通じて、自ら関わりながら相手や他者とつながろうとする子ども」の育成を目指し、子どもにとってコミュニケーションを図る必要感のある目的・場面・状況の設定について、新たな可能性を模索してきた。

５・６年生では、外国語科の学習で、同じみのり班の仲間に自分のことを紹介したり、質問をして相手と自分の共通点や違うところを見つけたりすることで、みのり班の仲間のことを知る楽しさを感じながらコミュニケーションを図れるよう、単元を考えた。

単元の振り返りには、「質問がうまくできると相手のことをたくさん知ることができて楽しくなる。」「相手が答えたことにさらに質問をしてみたり、自分も反応したりすると相手のことをたくさん知ることができるし、自分のことも相手に伝えることができることが分かった。」という言葉が見られた。単元を通して、「会話の流れに応じて、話す内容を考える」姿が見られた。

(2)　小学3・4年生における「外国語活動」の授業

今年度も、文部科学省作成の副読本「Let’s Try!①②」を主な教材として扱いながら、「聞く」「話す」活動を中心に学習を進めてきた。５・６年外国語科、中学校英語科との系統性を意識しながら、コミュニケーション能力の素地を養うために、様々な言語活動に取り組んだ。

４年生では、「相手はどう感じるのかという見方を働かせて、話す内容を再構築したり伝え方を工夫したりすることができる」という見方・考え方を働かせて、留学生と学習を行った。山形に来たばかりの留学生に、山形の魅力を知ってもらうために、動画メッセージで自分の大好きな場所を紹介した。

(3)　小学1・2年生における「英語遊び」

それぞれの学級と外国語ルームで英語遊びをした。好きな色や動物、野菜、テレビ番組、キャラクターなど、子どもたちの生活に根差した話題でコミュニケーションを図った。その結果、「仲良しの〇〇さんのことで、初めて知ったことがあって嬉しかったな。」という反応が多かった。また、休み時間にも「What color do you like?」と上級生に話しかけている姿も見られた。

(4)　幼稚園における小学生との「英語遊び」

英語コーディネーターが附属幼稚園を訪れ、年長組の子どもたちと一緒に「英語遊び」を行った。「遊びを通して英語に慣れ親しむ」をコンセプトに、幼稚園の子どもたちが、楽しみながら英語に触れることができるような活動を行った。簡単な英語を使いながら、自分の好きなものを友達と伝え合う活動を行った。

① コーディネーターとの活動

「happy」や「hungry」など、気持ちや体の状態を表す言葉について、リズムに乗りながら話してみたり、ミッシングゲームやジェスチャーゲームなどで楽しく慣れ親しんだりした。

② ５年生とのかかわり

来年度の１年生と６年生のつながりを入学前からもてるように、５年生と一緒に活動をした。「じゃんけん列車」や「ロンドン橋落ちた」など、幼稚園の子どもたちが普段している遊びを英語で楽しんだ。

(5)　中学校との連携

附属小学校、附属中学校の研究協議会に、小学校担当も中学校担当もお互いに共同研究者として参加した。それぞれの協議会で、小学校の学びと中学校の学びがどう結びついていくのかというところについて、参加者と一緒に話し合った。小学校の外国語科・外国語活動でも中学校の英語科でも、子どもたちが「話してみたい」「自分の考えを伝えてみたい」と思えるような目的・場面・状況の設定が大切になることを改めて確認することができた。

２ 成果と課題

○　幼小中の１２年間を見通した英語教育カリキュラムの構築に向けて、附属中学校や附属幼稚園と連携した実践を行うことができた。また、小学校低学年や幼稚園の子どもたちとの「英語遊び」の授業も行うことができた。

○　ＡＬＴだけでなく、山形市の国際交流員や地域人材とも連携した実践を行うことができた。

○　Ｗｅｂ会議システムや学習アプリの活用、動画撮影など、ＩＣＴを効果的に活用しながら授業づくりを行うことができた。

○　公開研究会や各地区での講話などを通して、附属学校園における英語教育の取り組みを発信することができた。

▼　小中連携について、教員同士の連携に加え、子ども同士がつながることができる単元を構想し、その取り組みを他校に発信していきたい。

▼　幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の外国語担当教員で互いの授業を見合い、情報共有を図ることを通して、目指す子どもの姿を具体的にイメージしていきたい。

活動を振り返って

教育情報化推進コーディネータ　奥山　恭平

１　活動の報告

（１）各学校園との連携

・附属特別支援学校

依頼を受け、児童生徒使用のChromebookで動作するアプリケーションの導入・相談にうかがった。いくつかのアプリケーションの中から、児童生徒のひらがな学習を促すものを検討し選択した。また、アプリケーションをインストールする際の管理者コンソールの扱い方についても説明を行った。

・附属幼稚園

依頼を受け、職員PCのメールシステムの連携や入園児保護者説明会で用いる説明動画の配信の方法についてのアドバイスを行った。メールシステムの設定については、各学校園で使用しているメールソフトが異なるため、口頭での伝達が難しいこともあり、園に出向いて設定を行った。入園児保護者説明会に用いる説明動画の配信方法については、附属小学校でも行っているYouTubeの限定配信の方法をお伝えした。その際、今後も継続して活用できるよう、新たにGoogleアカウントを設定した。

・附属中学校

３年技術「AI技術やプログラミングを用いた授業」に参観した。中学校段階での情報活用能力を学び、小学校段階でつけたい力について示唆を得た。

・附属小学校

児童用Chromebookの不具合の調整や相談、教員用PCの調整や設定を行った。また、教員用PCの入れ替えに伴い、業者との連絡調整・設定状況の確認を行った。附属小内に設置している学びカフェの運営やそれに伴う「やまがた学校改革推進協議会」への参加と発表、意見交流を行った。

（２）校務のＤＸ化を目指して

・アンケートのデジタル化

紙媒体で行っていた「保護者向け・児童向け・教員向け 学校評価アンケート」「ＰＴＡ保護者奉仕活動アンケート」「保護者向け・児童向け いじめに関するアンケート」等をGoogleフォームを用いたアンケートに変更し、データの収集・取りまとめを行った。デジタルデータとして打ち込まれたもののため、自在にソートをかけることができ、観点に合わせて活用することができた。

・ＨＰの更新

本校のホームページのこれまで行き届かなかった箇所の更新を行った。更新の際には、本校志願保護者・研究会参加希望者・在校生保護者等の閲覧者に向けてどのように発信すべきかという点、今後も持続可能な編集ができるかという点に配慮した。

・電子黒板やクロームブック、Google各種サービスの活用法の周知

・デジタル教科書の設定、周知、運用の促進の呼びかけ

（３）「学びカフェ」の運営

山形大学教員研修高度化事業の一環で、附属小学校に「学びカフェ」を設置している。「学びカフェ」のねらいは、
①学校マネジメント講座での「学校間ネットワーク」の利用
②「ゆるやかで・密な」職員間のつながりをつくる
③「気軽に・すぐに」情報の受信発信ができる場にする
である。写真のように、可動式テーブル、パーテーション、ホワイトボード、大型モニター、卓上モニター、ポータブルモニター、Wi-Fi ルーター、ノートパソコン等を設置している。「学びカフェ」では、学年会・教科部会・研究部会等の職員会を、開けた空間でリラックスしながら進めている。また、オンライン環境が整っているため、以下の外部の教育機関や学校とつながった。

・ 研究部　⇄　山形大学（研究協議会の打ち合わせ）

・ 外国語部　⇄　村山市立大久保小学校・天童市立津山小学校（指導案検討）

・ 算数部　⇄　山形市立東小学校（算数授業についての意見交流会）

・ 理科部　⇄　米沢市立西部小学校・筑波大学大学院（理科研究同好会）

今年度「学びカフェ」設立２年目ということもあり、普段使いという点で使用頻度が高くなった。また、教科部主催のミニ研修会を臨時で開くことができた。開けた空間、リラックスできる空間の中で気軽に集まり学べる環境を今後も整えていきたい。

２　課題と今後の取り組み

・ ＧＩＧＡスクール構想、学校 DX 化、ICT を活用した授業等、教育情報化がかなり身近になった今、ハード面もソフト面も様々な手法がでてきた。よりねらいに沿う形を選択できるようにするために、まずは試してみる、試行錯誤してみることを大切にしていきたい。また、他校での取り組みにもアンテナを高くし、選択肢が増えるようにしていきたい。
・ 附属小学校内での活動が中心となったが、昨年度と比較し、附属幼稚園・中学校・特別支援学校での取り組みが増えた。学校園のコーディネータとしてのさらなる活動につなげていくために、各学校園での取り組みの視察や課題とされている事の吸い上げを行っていく必要があると考える。
・ 令和６年１２月に学校園の校務用 PC の入れ替えがなされた。現在は大きな不具合等は報告されていないが、前リース機関メコムと現リース機関 RICOH との連絡調整も視野に入れておく必要がある。

幼稚園児と小学校第１学年児童との交流活動

1　ねらい

幼稚園該当

附属小学校１年生との交流活動を通して、小学校や１年生に親しみをもって関わり、入学後の生活や学習への期待感をもつ。

小学校

附属幼稚園の園児との交流活動を通して、園児の気持ちを考えながら行動したり、今年１年間の自分の成長を自覚したりする。また、かかわりを通して来年度のなかよしペア活動への期待を高めたり、具体的なかかわりの見通しをもったりする。

2　日時

（１）令和６年１１月～１２月　　　学級間交流
（２）令和７年　２月１４日（月）　給食交流
（３）令和７年　２月２６日（水）　わくわく小学校体験

3　場所　附属小学校・附属幼稚園

4　参加者　附属幼稚園年長児２０名・年中児２３名・年少児１９名
附属小学校第１学年児童８４名

5　活動内容

（１）学級間交流 （１１月～１２月）	小学生が幼稚園を訪問し、１年１組は年少組と、１年２組は年長組と、１年３組は年中組と、それぞれ交流した。秋のおもちゃづくりを一緒に楽しんだり、手遊びやダンス遊びをしたり、小学生が園児に絵本を読み聞かせたりと、多様な活動が展開された。
（２）給食交流 （２月１４日）	年長児が小学校を訪問した。１年生の介添えのサポートを受け、園児が給食の配膳を体験し、一緒に給食を食べた。
（３）わくわく 小学校体験 （２月２６日）	年長児が小学校を訪問した。「小学校で楽しみなこと」について話したり、年長児からの質問に１年生の子どもたちが答えたりする時間を設けた。

6　成果（○）と課題（▼）

幼稚園

○幼小の担任同士で授業や遊びの様子について共有を図りながら活動することができた。手紙をやりとりしたり１年生から秋のおみやげをもらったりして、心の距離が少し縮まった上で交流できたのがよかった。

○年中組が１年３組との交流を２回行った。１年生に年中児が好きそうな様々な分類の絵本の読み聞かせをしてもらい、本を通して自然と好きなものを教え合ったり、興味が広がったりするような交流ができた。

○学習課題や内容、目的、子ども達の実態を共有し、11 月から定期的に（月に 1 回程度）１年２組の子ども達と交流を行った。担任間で、子どもの姿や交流の目的、内容を話し合うことで、園児と児童それぞれに目的意識のある温かい交流となった。交流の時だけでなく、交流の写真や小学生の自己紹介カードなどを掲示したり、手紙や動画などでメッセージ送り合ったりすることで、「小学校の○○さん」「幼稚園の○○くん」など、お互いの名前を呼び合える「仲間」としての意識が芽生えた。１月の交流の際、年長児が１年２組の子ども達に「小学校に行って○○さんに会いたい」「４月、待っててねー」と話すなど、進学への意欲が高まった。

小学校

○　１１月～１２月、学級ごとに年長組、年中組、年少組と交流した。それぞれの学級が交流する組の園児を思い浮かべながら、相手意識をもって活動を計画する様子が見られた。秋の素材を使った遊びでは、小学生が園児の発想から学べることも多く、夢中になって一緒に遊んでいた。また、園児への絵本の読み聞かせを練習したり、当日一緒に本を読んだりすることで、読書に対する関心が高まり、より伝わるように工夫して音読しようとする姿も見られた。

○　給食交流では、盛り付けた給食を園児に配膳してもらうために、丁寧な言葉をかけながら園児をサポートするように心がけた。一緒に食べることを通して、来年のなかよしペア活動へのイメージが湧き、期待がさらに膨むと思われる。

○　わくわく小学校体験では、例年のようなステージ発表ではなく、学級ごとに工夫をこらして小学校生活を年長児に紹介する活動を仕組んだ。国語科の「学校のことをしょうかいしよう」、生活科の「もうすぐみんな２年生」という２つの単元を軸にしながらも、園児が学校生活について何を知りたいかを聞いたり、園児に伝えたいことを具体的に考えたりしながら、計画した。年長児とのかかわりを通して、子どもたちが成長した自分を自覚したり、来年度への意欲が高まったりするだろうことが期待できる。２年生になった子どもたちがどんな姿を見せるのかとても楽しみである。

第２回幼小連絡会　報告

１　ねらい　　年長児の遊びの姿をもとに、架け橋カリキュラムデザインシートを使って話し合うことにより、連続した子どもの育ち・学びについて共に考え、幼小のよりよい接続につなげていく。

２　日　時　　令和６年１１月２１日（木）

３　場　所　　山形大学附属幼稚園　遊戯室

４　参加者　　小学校・・・武田校長・芦野教務・長岡まつなみ支援室長・庄司養護教諭
１年生担任（髙橋教諭・青柳教諭・鈴木教諭）
幼稚園・・・高梨園長・伊藤(恵)教諭・伊藤(真)教諭（３歳児担任）
安藤教諭（４歳児担任）逸見教諭（５歳児担任）
藤本特別支援コーディネータ

５　内　容　（１）幼稚園の保育参観　１１月２１日適時
（２）協議会（１６：００～１７：００）
・５歳児の様子について（架け橋カリキュラムデザインシートをもとに）
・幼小連携の充実に向けて（今後の交流活動の予定確認）

話し合いの様子（一部抜粋）

・ルールのある遊び（ホッケー）が子ども達だけでも継続できるよう、先生方のさりげない援助が素晴らしいと感じた。（得点板、テーブルの色分けされたテープなど）いざこざになりそうになっても、自分たちでルールを確認したり思いを出し合ったりしながら、遊びを続ける姿が見られた。
・友達の言葉によく耳を傾けながら、一緒に遊びをつくっていこうとする姿が様々な場面で見られた。発達段階に応じた素材や道具の選択、環境づくり、遊びの場を意図的に残すことなどの援助が有効に働いているのだと感じた。
・年長児の姿を見て、ものを何かに見立てて友達とイメージを共有しながら遊んでいると感じた。小学校では、２年生ぐらいになると見立てや想像よりもより現実的な捉えになってくることが多いが、１年生は、まだ見立てて遊ぶ楽しさを感じられる時期なので、１年生のうちにそのような経験をたくさん積み重ねていきたいと感じた。

６　成果と課題

〇参観する時間はそれぞれ異なっていたが、協同性や言葉での伝え合いなどの子どもの育ちや、それを下支えする保育者の援助について出し合う中で、子どもの学びにつながる姿や援助などについて話し合いを深めることができた。
〇今後も、幼稚園と小学校の先生が、保育や授業を通して子ども達の姿を共に見て語り合うことを通して、架け橋期における「目指す子ども像」や育みたい資質・能力について理解を深めていきたい。また、「架け橋期のカリキュラム」を共に作成していくなど、幼小連携を積み上げ充実させるよう進めていきたい。

中学生による幼稚園運動会手伝い

1　ねらい
　幼稚園：中学生のお兄さんやお姉さんに親しみと憧れをもつようになる。
　中学校：幼稚園運動会ボランティアを通して、幼児との関わり方を学ぶとともに、主体的に運営に携わろうとする姿勢を養う。

2　日時　　令和６年１０月１２日（土）　８：３０～１２：００

3　場所　　附属幼稚園　園庭

4　参加者　ボランティア希望の３年生　　引率　教頭

5　内容　　競技の補助、道具などの準備、片付け

6　まとめ

＜中学校＞

〇年少、年中、年長と、年齢の異なる園児と順に関わったことで、園児の整列の仕方や話の聞き方、先生方の園児にかける言葉の違いなどから成長段階の違いに気付くとともに、子どもたちや自分の成長を実感するよい機会となった。

〇幼稚園の先生方の緻密な準備や、たくさんの保護者の方が率先して手伝いをしている様子から、生徒たちは、多くの方々の協力があるからこそ、安全・安心で楽しい行事を実施できるということを強く感じていた。さらに、たくさんの方々の支えがあるからこそ、自分が毎日楽しく生活でき、成長することができていることに気付いた生徒もいた。

＜幼稚園＞

〇園児は、７月に３回行われた家庭科「保育実習」で一緒に遊んでくれた中学生に親しみを感じており、運動会の中でも温かい声援や言葉掛けをしてもらうことにより、嬉しさを感じたり頑張ろうとしたりする気持ちにつながっていた。

〇幼稚園の保護者にとって、中学生が競技運営に積極的に参加し、機敏に行動する様子や園児に対して優しく丁寧に関わる姿は、子どもの育ちの見通しとなり附属学校園としての連携を感じるよい機会となった。中学生のそのような姿に、感動の言葉を伝えてくれる保護者も多数いた。

附属中学校授業・部活動参観

1　ねらい　　中学校入学前の児童が授業参観や部活動見学を行うことで、中学校生活に対する心配や不安を軽減し、中学生活への期待をもつことができるようにする。

2　日時　　１１月２２日（金）　１４：２０～１５：１０　授業参観

１５：２０～１６：００　部活動見学　※中止

3　場所　　附属中学校

4　参加者　　附属小６年生児童９９名

5　活動内容　　中学１年生から３年生までの全ての授業を参観

6　成果（○）と課題（▼）

○個々の興味関心に合わせて自由に教室を移動し、参観させていただいた。中学１年生から３年生の全ての授業を参観させていただいたことで、６年生の児童は中学生の学習の様子や授業の雰囲気を感じることができた。

▼中学校体育館の工事と悪天候が重なり、当日の部活動見学ができなかった。６年生の児童は部活動への関心が高いため、部活動見学については後日別日程で調整予定である。

【幼特連携：バザー・作業製品紹介・清掃活動】

幼稚園と特別支援学校高等部の交流及び共同学習

1　ねらい

幼稚園

（１）買い物、作業見学などを通して、特別支援学校高等部の生徒と触れあい、親しみをもつ。

（２）いろいろな製品の中から 100 円以内で自分の買いたい物を選んで買う。

特別支援学校高等部

（１）周りの状況に合わせて活動したり、自分の役割を工夫したりして、販売活動や清掃活動に取り組む。

2　日時　　令和６年７月９日（火）９：４５～１０：５０

3　場所　　山形大学附属幼稚園　遊戯室、玄関フロア

4　参加者

幼稚園	年中児	２０名
特別支援学校	高等部	２０名

5　内容

（１）高等部作業学習で製作した製品の販売と購入。

（２）部屋の清掃活動と清掃見学。

（３）幼稚園で使用しているベンチなど作業製品のメンテナンスと作業の見学。

６　成果（○）と課題（▼）

幼稚園

○バザー（買い物）を通して、やり取りをしながら自然な形で関わることができた。残金を見てもらい、まだ買えることを教えてもらったり、つくった人からおすすめの品を教えてもらったりした。

○木工製品のメンテナンスは、どの学年も作業の様子を見学し、きれいになったベンチを見て喜んでいた。

○園の窓ふき作業は、高等部の生徒が行っている様子を見て興味を示した園児が、やり方を教わりながら作業を手伝っていた。「やってみたい、おもしろそう」と思うことがあると、関わりが生まれるきっかけとなると思った。

○交流を通して幼稚園の友達以外の人と関わる楽しさや、一緒に自分の幼稚園をきれいにする経験を得ることができたと思う。

▼実際のお金を使っての買い物の経験がないため、一つ物を買うのに並んで会計をし、また次の物を買うのに並んで、まだお金が余っているからまた並んで買うという流れになり時間がかかってしまった。

特別支援学校高等部

○事前学習で、幼児の特徴について学習した上で一人一目標をたてて当日を迎えたことで、販売活動や清掃活動に取り組む中で、言葉遣いやかかわり方、表情を意識し、園児の目線で話しかけたり、笑顔で製品やお金を受け渡したりする姿が多く見られた。

○販売活動では、レジに並んで待っている園児が飽きずに待てるように声をかけてお話をしたり、どれを買うか迷っている様子を見ておすすめの製品を紹介したり、状況に応じて自分にできることを考えて取り組む姿が見られた。

○クリーングループの清掃活動は、園児が興味を持って生徒の話を聞いたり清掃の様子を見たりしてくれたことで、生徒は園児に伝わりやすいように清掃のやり方を伝え、交流しながら一緒に玄関ドアをタオルで拭くことができた。

○ベンチのメンテナンスでは、製品を園児から直接受け取ったり、メンテナンスが終わった製品を手渡ししたりすることで、園児の喜ぶ様子や直接のお礼があり、達成感や責任感を感じながら交流することができた。

○先輩方が製作したベンチが、実際に使われている様子を見ることができ、生徒の作業学習への意欲の向上につながった。

小学校と特別支援学校小学部の交流及び共同学習

1　ねらい

小学校

（１）特別支援学校の児童と活動し、相手の気持ちを受け止めながらたのしく活動するために必要なことが分かる。

（２）特別支援学校の児童と気持ちや考えを伝え合って、自分にできることを考え工夫することができる。

（３）特別支援学校の児童との様々な活動を通して、関わりの中で自分ができることをふやそうとする。

特別支援学校小学部

（１）附属小学校の児童と活動し、活動を共にする楽しさや活動に必要なことが分かる。

（２）附属小学校の児童と気持ちや考えを伝え合って、選択や決定をしながら共に活動する。

（３）附属小学校児童と様々な活動を通して、相手とよりよく関わりながら、自分の考えを深めようとする。

2　参加者

小学校

第３学年児童１組、２組、３組　１０２名

特別支援学校

小学部児童１組（１・２年)、２組（３・４年)、３組（５・６年）児童　１５名

3　日時、場所、内容　※時間は全て 10:25～11:25

	日　時	場　所	内　容
１回	５月２８日（火）	特別支援学校	動物まねっこ、魚釣りゲーム、制作活動など特別支援学校が企画した活動（３年２組と）
２回	６月２５日（火）	小学校	風船バレー、段ボールハウスでおにごっこ、紙粘土など３年２組の児童が企画した活動
３回	１０月９日（水）	特別支援学校	動物まねっこ、魚釣りゲーム、制作活動など特別支援学校が企画した活動（３年１組と）
４回	１０月２８日（月）	小学校	学校探検ビンゴ、昔あそび、的あて、玉入れなど３年３組の児童が企画した活動
５回	１１月１１日（月）	特別支援学校	動物まねっこ、魚釣りゲーム、制作活動など特別支援学校が企画した活動（３年３組と）
６回	１２月１０日（火）	小学校	すごろく、風船バレー、宝探し、爆弾ゲームなど３年２組の児童が企画した活動
事前事後学習	・各回の前に、自己紹介や活動内容の紹介などのオンライン交流を行った。 ・活動後は学習のまとめの時間を設け、各自が感じたことや学んだことなどについて振り返りを行った。		

4　成果（〇）と課題（▼）

小学校

〇各学級の１回目の交流は、どのようにかかわって良いか戸惑う様子が見られたが、その中で特別支援学校の児童の好きなことを見つけようとする姿があった。その見つけた好きなことを生かして、２回目の活動内容を考えていた。

〇特別支援学校の児童のことを考えながらどんな活動をしようか、考えることを楽しみながら各学級の２回目の交流の準備をする姿が見られた。

〇事前のオンライン交流があることで、つながりを意識できた。

▼ペアを決めないと、どのように関わって良いか、誰と関わって良いか分からず、　かかわりが難しい児童もいた。

▼最初に交流した学級が、特別支援学校の児童の好きなことを次の学級に伝えるなど、小学校の学年間の連携をとっていきたい。

特別支援学校小学部

〇各学級と２回ずつ行えて良かった。また、オンライン交流もペアの友達を事前に知ったり、自己紹介し合ったりでき、子供達の期待感やスムーズな交流につながった。

▼本校の児童の実態は様々であり、関わりの難しい児童もいる。そういった児童とペアになった小学校の児童が交流を楽しめたか、学びがあったかが気になる。

▼各学級２回ずつの交流では、深まる前に終わってしまう現状もある。

〇制作活動での交流及び共同学習は、小学校の児童の制作の様子から刺激を受け、友達の様子をまねたり様々な表現方法に触れたりすることができた。

▼制作活動での交流及び共同学習は、自分の作品作りに精一杯で、児童間のかかわりを深めることは難しい児童もいた。そのため、制作物を凝りすぎないようにする必要がある。

▼各２回目の小学校での交流の準備について、活動内容や準備物はとてもありがたいが、その準備が小学校の児童の負担になっていないか心配である。音楽、図画工作などの普段の授業に参加する形での実施も、次年度検討していけるとよい。

＜活動の様子＞

「オンライン交流」

「学校探検ビンゴ」

「みんなで描こう」

「玉入れ」

特別支援学校小学部３組と小学校の児童で制作した「みんなの楽しい町」

※小学校と特別支援学校をつなぐ道をイメージした制作物

附属中学校と附属特別支援学校中学部の交流及び共同学習

1　ねらい

中学校

（１）附属特別支援学校の生徒との交流を通して、障がいの違いや程度、インクルーシブの視点などを理解し、相手を尊重しながら協働していく大切さを知る。

（２）附属特別支援学校の生徒と一緒に体を動かす中で、互いに教え合ったり認め合ったりしながら主体的に関わろうとする態度を養う。

特別支援学校中学部

（１）附属中学校の生徒と活動する中で、相手のことを知ったり、活動を共にするしさや必要なことが分かったりする。

（２）附属中学校の生徒と気持ちや考えを伝え合ったり、動きを合わせたりして共に活動する。

（３）附属中学校の生徒と様々な活動を通して、相手とよりよくかかわりながら、自分の考えを深めようとする。

2　日　時　　令和6年12月3日（火）、11日（水）

3　場　所　　附属中学校　体育館

4　参加者　　中学校　2年生　生徒　　　133名
　　　　　　特別支援学校　中学部生徒　　14名

5　内　容

事前事後の学習	＜中学校＞ ・事前学習として、附属特別支援学校の生徒の自己紹介動画を視聴した。また、附属中学校の生徒も、自分たちのことを相手に伝えるために、自己紹介動画を作成した。 ・事後学習では、同じグループで交流した生徒に向けてメッセージカードを贈る活動を設定した。 ＜特別支援学校中学部＞ ・事前学習として、附属中学校の生徒のことをより知るためには、どのようなことができるかを考える時間を設定し、生徒からの意見を基に自己紹介動画の作成や本校の運動会で行った「３色のたいふーん」という競技を行うことを提案した。そして、お互いに動画を視聴し、交流学習への期待感を高めた。また、交流学習で、どのように関わりたいか目標を明確にして臨んだ。 ・事後学習では、グループでの活動を通して見つけた相手の良いところを振り返りシートにまとめた。
当日の学習	前半：中学校の体育祭で行った競技 「令和の参勤交代」（チーム対抗で毛布に乗った人を引っ張って運ぶリレー） 後半：特別支援学校の運動会で行った競技 「3色のたいふーん」（2人組で棒を持ちながら走って行うリレー）

6　成果（○）と課題（▼）

中学校

○自己紹介動画を事前に視聴したことで、生徒に見通しをもたせることができた。これにより、当日活動する際の言葉がけや行動に相手を気遣う様子が見られた。普段、特別支援学校の

生徒や障がいをもっている方に接する機会が多くない附属中学校の生徒にとって、まず相手を知るという段階が必要であると感じた。

○小グループで関わる時間を多く取ることで、一人一人の障がいの程度に違いがあることを実感させることができた。また、相手への理解を深めることで、相手に応じて関わり方を変える様子が見られた。実際に対話する中で、「自分たちと変わらずに話し合うことができる」「一緒に行動できず困っている相手に優しく声をかけたり、じっくり待ったりすることで意思疎通ができる」など、多様な気づきをもたせる貴重な機会となった。

○体育祭の競技をベースにした活動で勝敗をつけることで、相手の特徴を踏まえながら、その中で勝利を目指そうとする工夫や関わりが自然に生まれていた。ただ楽しく活動しようということに終わらず、どうすれば勝てるかのアイディアを出し合い、繰り返し練習して競技に臨んだことで、達成感や充実感の醸成につながった。

▼附属中学校の生徒が「お世話してあげる」という思いを抱きがちになってしまう。関わりが少ない段階ではその度合いが強く出る場合もあるかもしれないが、インクルーシブの視点を育むためには、その認識では不十分である。1学級との関わり、学年全体との関わり、と関わる範囲は年々広がってきているので、関わる回数を増やすなど具体的な手立てを講じる必要がある。例えば、第1回目の交流の機会を早めに設定することや、オンラインでの交流、少人数との交流など多様な関わりが企画できればよいと考える。昨年度来の課題である中学生活3年間の系統立てたプログラムの計画作成、実行が求められる。「障害について理解するための講話」「中学生による支援学校の訪問」については、附属中学校の総合的な学習の時間との連携を図ることで実施できると思われる。

特別支援学校中学部

○同世代の友達と活動を通してよりよく関わるというねらいから、自己紹介をしたり、運動会の学部種目の競技に取り組んだりした。今年度も小グループで活動し、練習や作戦タイムの時間を多く設定したことで、同じグループの友達に自分の思いを伝えたり、一緒に作戦を考えたりしながらから昨年度よりも主体的に関わる姿が多く見られた。

○事前学習でお互いを知る機会を設けたことで、より期待感をもって交流学習に臨み、運動会で行った競技を一緒にすることで、自信をもって作戦を話し合う姿が見られた。

○年度初めに交流及び共同学習のねらいについて、双方で確認したことで、相手をよりよく理解する多様な他者理解の実現に向けた活動を考えて取り組むことができた。

▼今年度もたくさんの友達と関わることはできたが、今後、お互いに関わりを深めて、社会性や豊かな人間性を育む交流及び共同学習にしていくために、どのような学習で、どのように行っていくかを今年度のうちから検討していく。

Ⅱ　付録

○山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程

平成28年4月1日

(設置)

第1条　山形大学附属学校運営規程第8条の規定に基づく附属学校運営会議の専門委員会として，山形大学附属学校研究・連携推進委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(目的)

第2条　委員会は，附属学校における研究を推進し，かつ，附属学校間の連携を推進することを目的とする。

(審議事項)

第3条　委員会は，次に掲げる事項を審議する。

(1)　大学と各附属学校とが連携した教育研究及び実証の推進に関する事項

(2)　公開研究会及び大学と各附属学校との共同研究に関する事項

(3)　附属学校間の連携の基本的方針に関する事項

(4)　附属学校合同研修会に関する事項

(5)　幼小連絡会及び小中連絡会に関する事項

(6)　その他前条に規定する目的を達成するために必要な事項

(組織)

第4条　委員会は，次に掲げる委員で組織する。

(1)　附属学校運営部長

(2)　附属学校運営副部長(研究担当)

(3)　附属学校運営副部長(教育実習担当)

(4)　主担当教員として地域教育文化学部に配置された教員の中から選出された者　3人

(5)　主担当教員として大学院教育実践研究科に配置された教員の中から選出された者　1人

(6)　附属学校の校長(幼稚園にあっては園長。以下「附属学校長」という。)

(7)　附属学校の教頭

(8)　各附属学校研究部長

(9)　その他委員会が必要と認める者

2　前項の第4号，第5号及び第9号に掲げる委員の任期は，2年とする。ただし，委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は，前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条　委員会に委員長を置き，前条第1項第1号に掲げる委員をもって充てる。

2　委員長は会務を掌理し，委員会を代表する。

3　委員長に事故があるときには，前条第1項第2号に掲げる委員がその職務を代理する。

（会議）

第6条　委員会は，委員長が招集する。

2　委員会は，委員の過半数が出席しなければ，会議を開き，議決することができない。

3　委員会の議事は，会議に出席した委員の過半数で決し，可否同数のときは，委員長の決するところによる。

4　前項の場合において，委員長は，委員として議決に加わることができない。

5　委員長は，審議結果を山形大学附属学校運営会議に報告しなければならない。

（部会）

第7条　委員会の下に，次の3つの部会を置く。各部会の運営に関し必要な事項は，別に定める。

(1)　共同研究推進部会

大学と附属学校の共同研究について計画し，実施する。

(2)　幼・小・中連携部会

附属幼稚園，附属小学校及び附属中学校の連携について計画し，実施する。

(3)　特別支援連携部会

附属特別支援学校とその他附属学校の連携について計画し，実施する。

（事務局）

第8条　委員会に事務局を置く。事務局は各附属学校の教頭が持ち回りで担当し，委員会運営に必要な庶務を行う。

（その他）

第9条　この規程に定めるもののほか，委員会の運営に関し必要な事項は，委員会が定める。

附　則

1　この規程は，平成28年4月1日から施行する。

2　次の規則は，廃止する。

(1)　山形大学附属学校研究推進委員会規則(平成17年3月7日制定)

(2)　山形大学附属学校連携委員会規則(平成21年6月1日制定)

山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程第７条に定める部会に関する申合せ

平成 31 年 4 月 24 日
附属学校研究・連携推進委員会

１　目的
この申合せは，山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程第７条に定める「共同研究推進部会」，「幼・小・中連携部会」及び「特別支援連携部会」の各部会の運営について，必要な事項を定めるものとする。

２－１　共同研究推進部会

(1) 大学と附属学校の共同研究を推進することを目的とし，大学教員及び附属学校教員で構成する。
(2) 共同研究推進部会は，次の研究部会で構成する。

国語教育	社会科教育	算数・数学教育
理科教育	音楽教育	造形美術教育
保健体育教育	家政教育	外国語教育
幼児教育	道徳教育	生活科教育
特別支援教育	養護	学校外教育
ＩＣＴ教育	インクルーシブ教育	英語教育
ＳＤＧｓを踏まえた教育		

(3) 研究部会への所属については，原則として年度初めに附属学校研究・連携推進委員会において確認する。所属確認は，附属学校教員または大学の同部会員の推薦と本人の同意に基づいて行う。
(4) 地域教育文化学部及び教育実践研究科の教員はいずれかの研究部会に積極的に所属するものとする。附属学校教員は，原則としていずれかの研究部会に所属するものとする。地域教育文化学部以外の教員についても，研究部会員の推薦に基づいて研究部会に所属することができる。
(5) 各研究部会は２人以上で構成し，各研究部会に大学教員の中から選出した部会長１人を置く。
ただし，ＩＣＴ教育，インクルーシブ教育，英語教育及びＳＤＧｓを踏まえた教育の研究部会にあっては，附属学校教員の中から選出した部会長１人を置くものとする。
(6) 研究部会の設置及び改廃等に関する事項は，附属学校研究・連携推進委員会において決定する。
(7) 各研究部会は，年度当初に研究テーマを決定の上共同研究を行い，年度末に附属学校研究・連携推進委員会に研究結果報告を行うものとする。各研究部会の研究テーマは，各附属学校の公開研究会のテーマと関連した研究テーマや，他の主体的研究テーマとする。
(8) 研究部会に所属する大学教員は，各附属学校の公開研究会において，指導助言者ではなく，共同研究者として積極的な役割を果たすものとする。

２－２　幼・小・中連携部会

(1) 附属幼稚園，附属小学校，附属中学校の連携について具体的に計画し，実施することを目的とする。

(2) 幼・小・中連携部会は，附属学校運営副部長（２人），学部選出の研究・連携推進委員会委員（１人），幼・小・中の各教務主任（３人），コーディネータ（４人），各研究部長（４人）で構成する。

※座長は，研究担当の附属学校運営副部長が務める。

(3) 部会の開催は，議題に応じて，次の方法のいずれかとする。

(a) 研究・連携推進委員会と同日開催（研究・連携推進委員会終了後に開催）

(b) 研究・連携推進委員会と別の日に開催（幼・小・中連携部会＋特別支援連携部会の連続開催）

(c) 研究・連携推進委員会と部会の合同開催

(4) 附属小学校を主幹校とし，作業部会の議題の整理，会議の案内，進行等を務めるものとする。

２－３　特別支援連携部会

(1) 附属特別支援学校と幼・小・中との連携について具体的に計画し，実施することを目的とする。

(2) 特別支援連携部会は，附属学校運営副部長（２人），学部選出の研究・連携推進委員会委員（１人），幼・小・中・特の各教務主任（４人），コーディネータ（４人），各研究部長（４人）で構成する。

※座長は，研究担当の附属学校運営副部長が務める。

(3) 部会の開催は，議題に応じて，次の方法のいずれかとする。

(a) 研究・連携推進委員会と同日開催（研究・連携推進委員会終了後に開催）

(b) 研究・連携推進委員会と別の日に開催（幼・小・中連携部会＋特別支援連携部会の連続開催）

(c) 研究・連携推進委員会と部会の合同開催

(4) 特別支援学校を主幹校とし，作業部会の議題の整理，会議の案内，進行等を務めるものとする。

附　則

この申合せは，平成 31 年 4 月 24 日から施行する。

附　則

この申合せは，令和 4 年 4 月 1 日から施行する。

附　則

この申合せは，令和 5 年 6 月 7 日から施行し，令和 5 年 4 月 1 日から適用する。

山形大学附属学校研究・連携推進委員会委員名簿

（令和６年４月１日現在）

	氏　　名	現　　　職
委員長（1号委員）	三　浦　登志一	（附属学校運営部長）
委　員（2号委員）	山　﨑　義　光	（附属学校運営副部長）
委　員（3号委員）	澁　江　学　美	（附属学校運営副部長）
委　員（4号委員）	佐　藤　博　晴	（地域教育文化学部教授）
	坂　本　明　美	（地域教育文化学部准教授）
	菊　田　尚　人	（地域教育文化学部講師）
委　員（5号委員）	石　﨑　貴　士	（大学院教育実践研究科教授）
委　員（6号委員）	高　梨　明　恵	（附属幼稚園長）
	武　田　重　泰	（附属小学校長）
	森　本　真　紀	（附属中学校長）
	森　谷　久　美	（附属特別支援学校長）
委　員（7号委員）	西　長　　　大	（附属小学校教頭）
	斎　藤　善　行	（附属中学校教頭）
	鈴　木　晶　子	（附属特別支援学校教頭）
委　員（8号委員）	安　藤　枝　里	（附属幼稚園研究主任）
	佐　藤　大　将	（附属小学校研究部長）
	矢　作　創　己	（附属中学校研究部長）
	岩　井　大　地	（附属特別支援学校研究主任）
委　員（9号委員）	伊　藤　恵里奈	（附属幼稚園教務主任）
	芦　野　繁　樹	（附属小学校教務主任）
	金　澤　彰　裕	（附属中学校教務主任）
	柴　田　雄一郎	（附属特別支援学校教務主任）
	藤　本　沙　織	（特別支援教育コーディネータ）
	数　見　静　香	（メンタルケアコーディネータ）
	中　村　優　太	（英語教育コーディネータ）
	奥　山　恭　平	（教育情報化推進コーディネータ）

※4号，5号及び9号委員の任期は2年（R6.4.1～R8.3.31）

編集後記

大学と附属学校との共同研究・連携の更なる充実を目的として、「附属学校研究・連携推進委員会」が組織されて９年目、連携活動としては１６年目となる。

現行の学習指導要領において、急激に変化する予測困難な時代を生き抜いていく子供たちに必要な資質能力を育成していくことが求められている。この資質能力を育成していく上ではもちろんだが、人権教育などの観点からも、家庭・地域、関係機関との連携及び校種間の連携の重要性が増している。大学と四校園が一体となって学びを深めることができる附属学校園の強みを生かし、幼児・児童・生徒、さらには教職員間の交流を進める体制を整えながら、互いに高め合う連携がなされている本活動は、未来を担う子どもたちにとっても教職員にとってもかけがえのない学びとなる。

これからも、大学・校園間の相互協力、相互研修を進めながら、連携活動をより一層推進していきたい。

令和６年度　附属学校研究・連携推進委員会事務局
附属中学校　教頭　斎藤　善行

令和６年度
附属学校連携活動報告書

発行日　令和７年３月３１日

発行者　山形大学

編集者　山形大学附属学校連携委員会
〒990-0023　山形市松波2丁目7番2号